

「未来」の格言 P・F・ドラッカー

企業経営漫談士 岡野実空

我がラスト(50)スパート29回目のテーマは、「未来」に関するドラッカーの格言。確保した「時間」を使い、私たち組織人が注力するのは「未来のニーズ」への対応、すなわちイノベーション。今回は泰斗の歴史家としての発言の中から、「未来」に関する格言を取り上げます。

その1: 21世紀の基本認識

前世紀末、ドラッカーの時代認識は、「先進国については、そしておそらく世界全体についても、すでに一つのことが確実である。根本的な変化の時代に入ったということである。それらの変化は、経済や技術だけの変化ではない。人口の変化であり、政治の変化であり、社会の変化である。哲学の変化であり、何にもまして世界観の変化である」。

それはデカルトに始まった近代合理主義、すなわち部分最適の和が、自動的に全体最適につながると無邪気に信じられた時代の終焉を意味します。

そして21世紀は、各部分が幾重にも絡み合い、全体を複雑な生態系として捉える時代。またその移行に伴う混乱は、2020年あるいは2030年を超えても続くと思いましたが、どうやらその意識転換ができない人間が残存する限り、「激動の時代」は続くことになりそうです。

その2: 「未来」の認識と対処法

さて歴史家としてのドラッカーは、そのような時代に直面し、戸惑う私たちに向け、いち早く下記のような警告や助言を発していました。

「明日も今日と同じだと考えることこそが、最大の過ちにつながる」。そして「われわれは未来について二つのことしか知らない。一つは、未来は知りえないこと。もう一つは、未来は今日存在するものとも、今日予測するものとも違うことである」と。

またそれに対する最も確実な対処法は、「すでに起こった未来を知り、それを利用しながら、自らの手で未来を創ること」。すなわち、「すでに起こり、もどに戻ることのない変化、しかも重大な変化でありながら、いまだ認識されていないものを知覚し、かつ分析すること」です。そのため私たちは、各自がさまざまな場所で「定時・定点」観測をし、見出した「変化」を周囲に伝え、それを組織として確認し合う習慣を身に付けなければなりません。

📖 出典 (上田惇生訳、ダイヤモンド社)

その1: 『明日を支配するもの』

その2: 『断絶の時代』

『すでに起こった未来』

その3: 『明日を支配するもの』

『ネクスト・ソサエティ』

その3: 「未来」に向けたマネジメント

「未来を築くためにまず初めになすべきは、明日何をなすべきかを定めることではなく、明日を創るために今日何をすべきかを定めることである」。かく言う泰斗がとりわけ常人と異なるのは、組織の「マネジメント」の領域において。

その代表は、上記の習慣に加え、先に取り上げた「時間」同様、「事業」においても「計画的廃棄」を行い、「未来」に向けた動きを自動化する仕組み。それは泰斗の熱心な生徒だったトヨタ流に言えば、人偏の付いた「自動化」です。実際同社は、「自動織機」を嚆矢に、それによって組織の三意識(危機・問題・当事者)を呼び覚まし、既存事業の絶えざるカイゼンと新規事業の開発に結びつけてきました。

ところが近年のトヨタは、広告でトップ自ら、ガソリン・HV・EV・水素車の「全部本気」を連呼し、「計画的廃棄」そのものを廃棄したかのようです。それが戦略の「煙幕」でない限り、その転換の妥当性は「未来」の社会が判定することになります。

一方私たちは、下記の泰斗の箴言を根拠に、「まず何かを捨て、それによって何かを得る」という鉄則を尊重することにしましょう。

「自ら未来をつくることにはリスクが伴う。しかし、自ら未来をつくろうとしないほうがリスクは大きい。成功するとは限らない。だが、自ら未来をつくろうとせずに成功することはない」。

2022年8月22日 実空